

がいし製造で培った独自の技術力を核に、 多様な産業分野に進出

日本ガイシは1919年、社会の近代化を支える磁器がいしメーカーとして誕生し、以来99年間、世界の電力インフラを支えてきました。一方、がいしの生産で培ったセラミック技術を軸に多くの製品を生み出し続け、さまざまな産業分野で存在感を発揮しています。

1919 特別高圧がいし

日本に電気が普及し始めた明治期。高電圧に耐えるがいしは輸入品に頼っていました。「営利ではなく、国家への奉仕としてがいしを国産化しなければならない」（初代社長・大倉和親）。そんな使命感から、一片の米国製がいしを手掛かりに、特別高圧がいしの研究が始められました。

人々の暮らしや産業発展に貢献したいという創業の精神は、現在の企業理念にも受け継がれています。



電力貯蔵用

「NAS[®]電池」

独自の高度なセラミック技術により、メガワット級の電力貯蔵を世界で初めて実用化。風力発電や太陽光発電の出力安定化用途での導入も増え、再生可能エネルギーの普及やスマートグリッド(次世代送電網)の構築に役立っています。



2018



自動車排ガス浄化用セラミックス 「ハニセラム[®]」

自動車排ガス中の有害物質を無害化する触媒を保持するためのセラミック担体です。排ガスの浄化効率を最大限に高めるために薄壁化と軽量化を追求し、わずか0.05mmの超薄壁化を実現。エンジンパワーのロスも最小限に抑えます。

世界初の車載用センサー

「NOxセンサー」

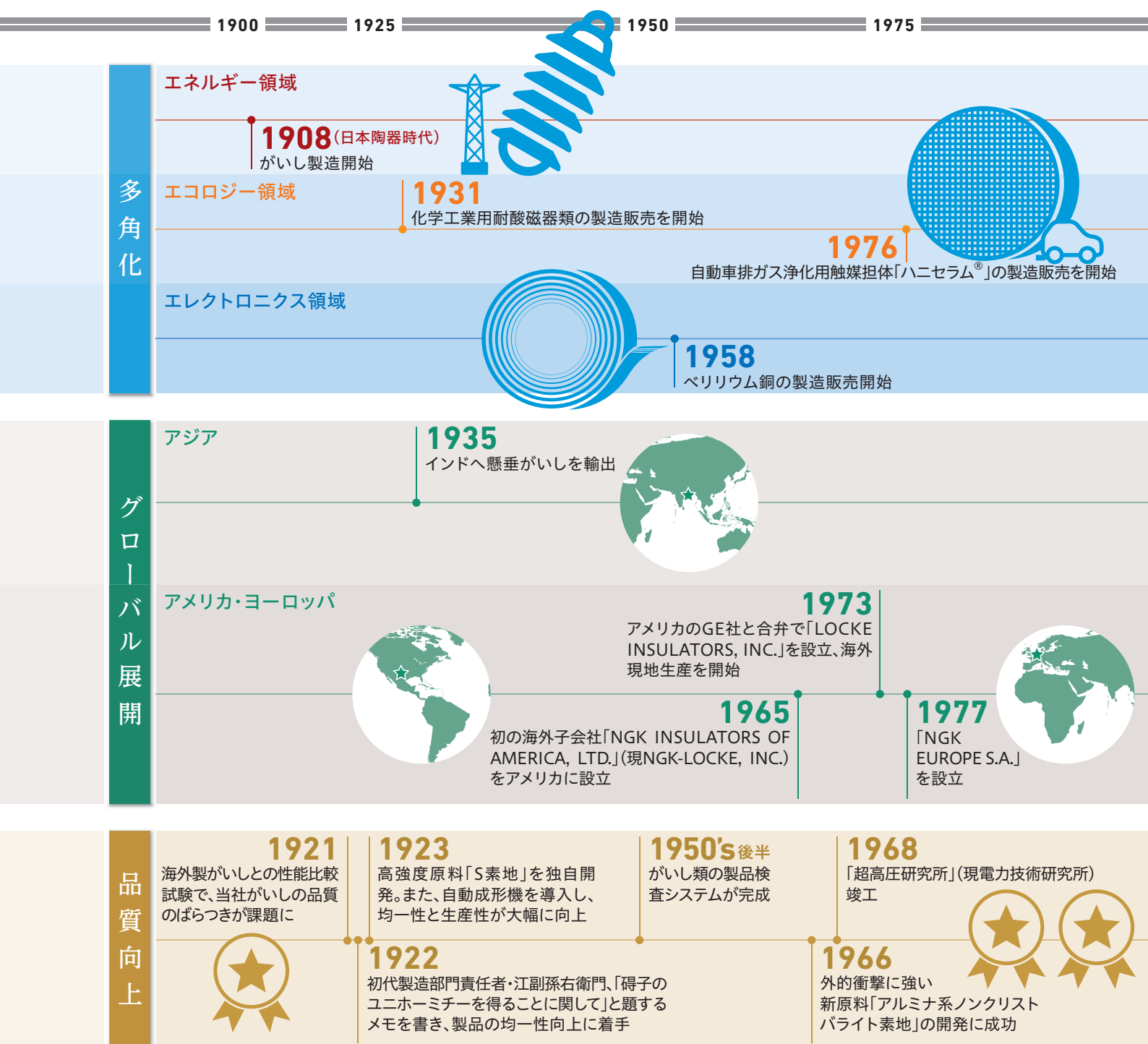
自動車の排ガスに含まれるNOx(窒素酸化物)濃度をppm(100万分の1)レベルで測定。リアルタイムにNOx濃度を計測し、情報をエンジン制御にフィードバックすることで、排ガス浄化装置を精密に制御し、NOxの排出量を削減します。



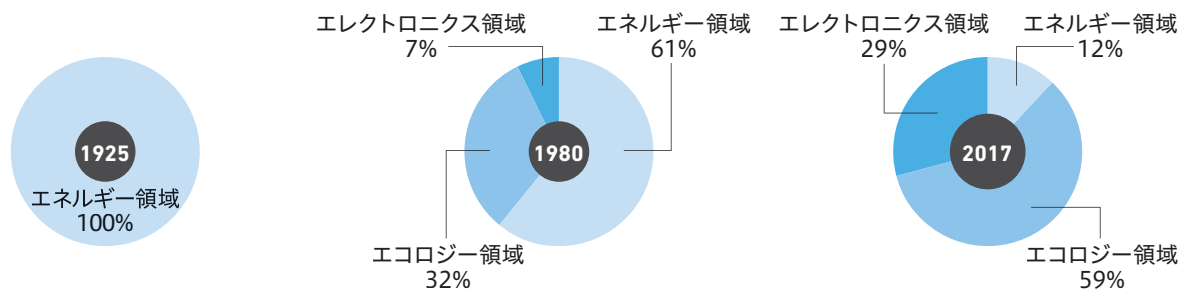
創業以来受け継ぐ、事業の指針

多角化、グローバル展開、品質向上

日本ガイシは創業以来、セラミック技術を磨き抜くことで高い品質と信頼性を誇る製品を提供し、同時に事業の多角化とグローバル化にも積極的に取り組んできました。今も常に新たな領域に挑み続け、持続的な成長を図っています。



■事業領域の変遷(売上高ベース)



1985 2000 2010 2015

2003

NAS[®]電池の量産を開始



1989

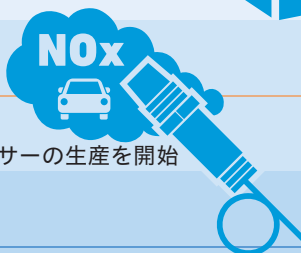
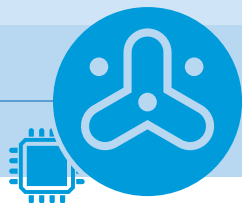
ディーゼル・パティキュレート・フィルター (DPF) の生産を開始

1996

自動車排ガス用NOxセンサーの生産を開始

1996

半導体製造装置用セラミックスの量産を開始



1996

中国にがいし生産のための「NGK唐山電瓷有限公司」を設立

1996

インドネシアにハニセラム生産のための「P.T. NGK CERAMICS INDONESIA」を設立

2015

タイにハニセラム、DPF生産のための「NGK CERAMICS (THAILAND) CO., LTD.」を設立

1985

ベルギーに「NGK CERAMICS EUROPE S.A.」を設立、ハニセラムの現地生産を開始

1988

アメリカに「NGK CERAMICS USA, INC.」を設立し、ハニセラムの現地生産を開始

2003

ポーランドにDPF生産のための「NGK CERAMICS POLSKA SP. Z O.O.」を設立

1982

AC工場が日本メーカーで初めてフォード社の「Q1賞」を受賞

1999

電力技術研究所が、日本で初めて高電圧試験の国際的な試験所に認定

2009

「ものづくり構造革新」実施、生産システムや設計、製造設備などをゼロベースで見直し

